

高齢者の話を物語的な表現様式として理解すること

小野田 貴 夫

はじめに

質問に対して、要領を得ない冗長的な話を返す高齢者がいる。その話の特徴を、物語的な表現様式として理解する観点から、論じてみたい。また、このような問題設定の必要性やそこに至るまでの過程についても、私が介護関連施設の相談員として冗長的に話す高齢者に接してきた実践的な感覚やエピソードをたどりながら、示していきたい。

理論的な観点

語彙の特徴、文体的特徴、扱う内容（現実に即したものか、フィクションか）の傾向、表現のジャンル（詩か、物語か、エッセイか、論文か等）等を表現様式という観点から総体的に理解できる視点を求めて、吉本隆明（1990）の表出論を基に、次のような表現空間（図表現空間）を想定し、考察を進めてきた（小野田 1997, 2005, 2006, 2006, 2007）。この図に今回テーマとしている物語的な表現様式を位置づけると、 γ の付近になる。本論では、その位置づけから高齢者の冗長的な話の特徴を理解していく。また相談員やケアマネの論理-科学的な表現様式は、 β に位置付けられる。

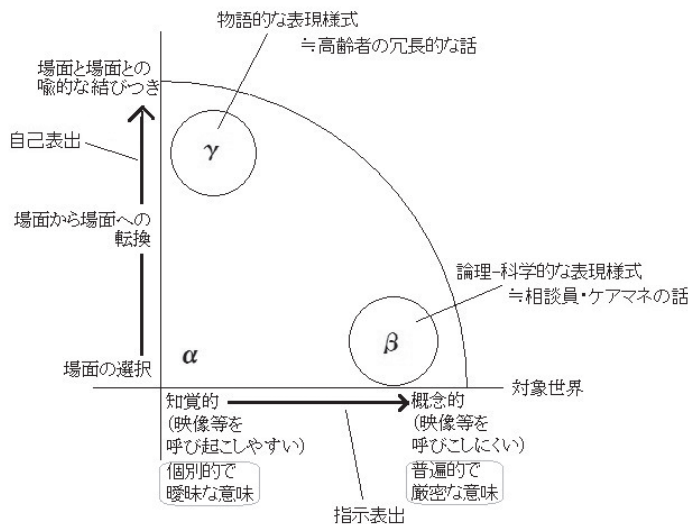


図 表現空間

冗長的で要領を得ない話

介護関連の施設で相談員をしていたころ、介護をはじめとする何らかの支援を必要としている対象者——ほとんどが高齢者とその家族——と話をしている中に、こちらが知りたい情

報についてはなかなか話さないのに、関係がないように思えることをいつまでも長く話す方がよくいた。心身の調子や今後の生活の要望を話してほしいのだが、それについてはなかなか話さずに、他のことばかり話すのである。

たとえば、ある男性のお年寄りの家族からデイサービスを利用したいと相談があり、自宅に伺った時のことである。家族からそのお年寄りの生活の仕方や身体の状態について聞いたあと、お年寄り本人と私の二人だけでその方の居室で——戸も閉めて——話をすることとなった。そこで、本人から、アセスメントシートの項目にそって身体の状態——歩く時の不自由等——を聞きはじめると、それはともかくといった感じで嫁の悪口を語り出した。私としては、デイサービスの利用にむけていわゆるADLに関わる心身の状態について情報を集めなくてはいけないのだが、それがなかなか得られない。一方自分が嫁によってどれだけ虐げられているか、さまざまなエピソードをあげては不満を口にした。

また別のケースであるが、以前から介護サービスを利用していた女性が、腰痛で受診することになり、医師による問診の場面に一緒に立ち会うことになった。整形外科の医師に状態を聞かれて、その女性は、親しかった友人の葬儀に先週出て、その友人というのがとてもよい人で……と話しはじめ、その友人との様々なエピソードを続けて語りはじめた。話はなかなか終わらずに、聞かされる医師のほうも面倒な様子であった。私は横にしながら、そのお年寄りの話に割って入り、要するに腰の状態がどうなのか、話題の軌道を修正しようとしたのだが、一方でその方が続ける話の腰を折るのも申し訳ない気がして、何もできなかった。

もちろん、すべての面談や問診の場面で、このように進むわけではない。聞かれたことに対して短く機械的な答えしかしない人も少なくない。認知症や脳卒中等による機能的な障害があるわけではないのだが、「はい」か「いいえ」の質問にさえなかなか答えてくれない人もいる。話さないということは、話せないのか、話したくないのであろう。良く知らない人に対してであったり、緊張が高い関係であったり、内容がある種の損得を含んでいたり、そもそもどう表現していいかわからない事柄であったり、と様々な理由が想定できる。話さないことも、度を超えるとその理由が理解しづらいが、話すということも、度を超えてたくさん話すとなると、やはり理解できないところがある。心身のコンディションに関する質問に対して、直接関係のない体験談や生活実感に話題が移って行って、そうした話がなかなか止まらなくなってしまう方は、少なくない。こちらの質問などまったく関心がないかのように、一方的に自分の話したいことを話し続ける（ように見える）方もいる。

訪問介護やデイサービス等の介護サービスを利用するにあたっては、それを利用する高齢者についての情報——サービスを利用する目的やその理由となる心身の状態や家族関係等——を関係機関に提供するために、文書を作る必要がある。しかし、先ほど述べたようなお年寄りが口にした多くのエピソードは、そこには載らない。入居施設の相談員をしていた時、入居者の生活記録を書くこともしていたが、そこにも健康面や生活上の問題点——他の入居者とのトラブルや苦情——を中心に載せるだけであった。しかし実際には、必要な情報を聞き出したり確認したりする過程で、それ以上の多くの話がお年寄りによって語られている。それらは、何を意味しているのだろうか。

時に必要な情報以上に多く語られる必要でないことがらは、限られた時間に必要な情報を集めなくてはいけない職業的な立場からすると、無駄であったり邪魔であったりする。また一個人として、それを聞かされてもどう答えればいいのか困る、というような話もある。に

もかかわらず、実際に話されているのであって、必要なこと以上に存在感をもっていたり、ぼんやりと、または鮮明なイメージを作りだしたりしている。

話題の選択と展開

——パーキンソン病の女性の話——

在宅介護支援センターの相談員をしていた時、いわゆる処遇困難ケースとしてある独居の女性高齢者について、保健センターの保健師、民生委員、ケアマネージャ、訪問看護師を交えたいわゆるケースカンファレンスを開いた。処遇困難である点は、直接的にはパーキンソン病の服薬管理が正しくできていないことにあり、たとえば入浴中に薬の効果が切れて、浴槽から出れなくなってしまうこともあった。しかし、当人と向き合うときにもっと難しいと感じられるのは、はっきりとした病気や障害のような診断名を持たないコミュニケーションの問題であった。というのも、その女性は、一方的に自分の思うことだけを話して、服薬管理をはじめとするこちらの指示を聞いてくれないのである。聞ければ実施してくれない、というよりも、こちらが話す際を与えないほど話し続けるので、文字通り聞いてくれないのである。私たちの方は、少しでも安全に健康に過ごせるようにあれこれと提案したり指導したりするのだが、そんなことにはさっぱり関心を示さずに、好きなことを一方的に話し続け、その態度に私たちはいらだちを感じていた。

それらの対処にむけたカンファレンスの中で、医療面や生活管理に関して直接関係はないが、その方がよく話題にすること——家族の悪口、近所への不満、家にやってくる人達への評価、以前の勤務先でのエピソード、部屋の中にあるはずの大事な物等々——を載せた資料を作り、参加者に配った。この女性が口にする話題の広がり方や展開にはパターンがあって、それをある程度親身になって聞いていると、今度はこちらの話を聞いてくれるタイミングが訪れることが経験的にわかってきたからである。

それがわかるには、かなりの時間がかかった。そもそもこの女性の話に付き合ったら、どこまで話がのびていくのか、忙しい業務のなかでは、なかなか確かめる気になれなかった。実際に話をただ聞く、または右から左へ話を流していくのは、楽なことではない。独り言ではなく他でもない自分に話しかけられていると感じる以上、何らかの反応を示す必要を感じてしまう。一方的に人を責めるような不平不満やあまりに筋の通らないわがままな言葉に対して、はいそうですか、と聞き流すことはなかなかできない。たとえ年上の方であったとしても、誤解や偏見を修正したいと思い、理屈を整理しながら反論してみたり、必要があれば途中で話を中断させて強制的に話の筋を戻したりしてきた。この女性の話にどこまでも親身になって共感的に付き合ったらどういう風になるのか、誰も知らなかったのである。いくつかのきっかけを通してであるが、反論も否定もせずに話に付き合いしていくことを繰り返していくうちに、この女性の話題展開にパターンがあることが理解できるようになってきた。それがわかることで、一方的に話を聞かされる時の精神的な負担はいくらかやわらぎ、話の主導権をこちらに移すタイミングが作れるようになった。

選択される話題の種類や展開のパターンが理解できることよりも、福祉・医療の現場の基本としてよく言われる受容的な態度が、信頼関係を生んだために、コミュニケーションの取り方に変化が生じたのかもしれない。しかし一方で、現場での実感としては、話のパターンがつかめることで、受容的な態度を形式的な態度を超えて深めることができた。そうしたこ

とが支援する人達の間で共有できればよいと思った。

—死にたい女性の話—

また別の女性のケースであるが、電話で在宅介護支援センターに連絡をしてきた。相談内容は、死にたいのだがどうしたらよいか、というものだった。もうすでにかもいに紐をかけて、いつでも死ぬ状態にあると言う。もっと具体的な生活上の悩み——たとえば、足腰が弱って自由に外出できない等——を聞いているうちに、しばらくしてから「死にたい」と漏らす方は少なくない。しかし、最初から「死にたい」と切り出す人は、それほど多くなかった。どれほどの緊急性があるのか電話の内容だけでは把握できず、どう対応していいのか、わからなかった。死にたいというのだから、切羽詰まった事情があるのだろう、と思いつつ、ともかく「どうしたのですか、何かあったのですか」といった質問からはじめて、具体的に聞いていった。しかし、質問に対して答えにならない答えしか得られない。すぐに話題が逸れていくのである。最近、自分のマンションの裏に新しいスーパーができた、そこではたぶんおいしいウナギを売っているだろう、でも外へ出るのが億劫である、好きな蕎麦屋が美術館の近くにあって、友人とよく食べに行ったものだが、その友人も…という具合である。まっすぐに話は進まないであれこれと脱線するので、その都度強引に話題を戻しながら話をつなげていくと、要するに、足腰が弱くなり自由に外出できなくなってきた、買い物にも不自由するし、友人との付き合いも制限されてしまう、元気もなくなってくるし、食欲もない、寂しい、この状態が続いていくくらいなら、死にたい、ということのようである。であれば、外出できる方法や寂しくならない方法——外出の介助やデイサービスの利用等——を提供すれば良いと、現実的な解決を狙った提案をしたくなるのだが、こうした提案にはほとんど耳を貸さない。また最初に戻って「死にたい」と言い始めて、同じようにあれこれと脱線する話題の軌道修正をしながら「死にたい」理由を、確かめていく。そして、同じような理由を答えてもらい、だったら、ヘルパーさんやデイサービスの利用がよいですよ、と提案するのだが、やはり納得しない。こうしたことを延々と繰り返していき、頭の片隅にこのまま自殺されたらどうしたものかと心配しながらも、このままずっと話に付き合うわけにいかないと、適当な理由を思いついては電話を切る、といったことが数日続いた。そのうち職場のなかでも、その方から電話があると、またか、といった雰囲気になっていった。

「死にたい」理由を確認して、それを解決するという発想の話の運び方では埒が明かないので、この方の場合も先ほどの女性の例と同じように、ともかく話題が逸れてもそのまま聞いていくことにしてみた。すると、「死にたい」からはじまって、あれこれと話題はめぐるのだが、なんとか説得しようと骨を折っていた時よりも、早く話が収まっていった。しばらくこちらから解決策を提案するのは止めて、ともかく聞くことに徹しているうちに、やはり話題の流れにある程度パターンがあることがわかってきて、こちらから現実的な提案を出していくタイミングが計れるようになり、やがて少しずつこちらの話を受け入れてくれるようになっていった。

次々と話題をずらしていく高齢者と、筋の通った話へと矯正したい職員とのかみ合わない会話を、日々見聞きし、実際に自分が体験してきた。そして、試行錯誤と勘とに頼りながら、かみ合わない会話を——かみ合うようにするというよりも——、互いの希望が両立するように調整してきた。現在は相談を聞くこと自体が業務ではないが、学生から相談を受けている

時にある種の既視感をもつことが度々ある。

文字として見ること

お年寄りとの会話のずれを日々体験していたが、実際の発話をボイスレコーダで記録して確かめようとしたのは、自分が福祉の現場を離れてからになる。今の時点から振り返ってみると、現場で働いている時にこそ、自分が利用者とのどのように話していたのか、音声記録をとって反省的な材料にすべきであったと思う。お年寄りと自分が実際に何をどのように話したのか、聞き直してみたり、文字化してみると、学問的に洗練された客観化の作業を経なくても、非常に多くの発見があるだろう。

音声記録をそのまま文字化したものと、たとえ会話の直後であったとしても記憶に頼りながら文字にしたものとは、違っている。カンファレンスや事例検討会で、会話の内容を取り上げて議論することがあるが、それは大方、論理的な説明のいわば標準的なフォーマットにそって再構成されてしまっている。文字化したものをながめると、実際のお年寄りの話のなかには、一見不必要に思えたり、意味を一義的に確定できない言葉や話がいくつもあって、話題がもっと別の方向に分岐していく可能性がいくつもあることがわかる。また一方で、職員の側に、意識的にも無意識的にも、理解できるように理解するという聞き方——質問の仕方や納得の仕方——をしていることもわかる。コミュニケーションの取り方に変更の余地があることや、それによって職員—利用者間の関係を変えていく可能性があることを改めて認識できるのである。

また一方で、すぐに付け加えておくと、文字化してゆっくりと眺める余裕など現場にはない。また、文字化することは、場合によると知りたくない部分——いい加減で、思いやりに欠けた自分と向き合わなくてはならない——も多く含んでいる。そんなことはしないで、とりあえず今の均衡を保ちながら業務を回していくのが、現場の実際でもある。

ケアマネと高齢者との会話——説得する立場と私の個別性を語る立場——

先にあげた相談員としての私のように相手を合理的に理解し説得したい職員と、話題を次々とずらしていく高齢者とのかみ合わない会話は、自分が記録した資料の中では、ケアマネと要支援高齢者との会話のなかで再現されている。

Xケアマネ：「今のヘルパーさんがね、あの、お手伝いに入ってますね、お掃除と、薬と、で一応ね、まあヘルパーさんが入るにあたって、Aさんのね、生活での、ま、問題というかね、まあ、あの普段一人暮らし、お部屋での（うん）生活をしていくうえで、不自由があったからヘルパーさんに来てもらった形（うん）、になったもんだから、ま、自分、お一人で、自分一人でね、ヘルパーさんを最終的には使わなくてもちゃんと健康的な生活ができるように、まあ、（うん）計画書いていうんだけど、こういうのを本来作ってね（うん）、でヘルパーさんを効果的にね、利用していきましょうというのが介護保険の位置付けになったもんだから、ちょっと難しい話。うん、だから、ヘルパーさんはお手伝いさんじゃないもんで、Aさんとこに来るけど。」

A氏：「ただね、俺のはね（うんうん）、医者任せで（うんうん）、医者言う事聞いてるだけんね（うんうん）。医者に相談したらね（うん）、体重増えないって・・・、こう、飯が食えても、初めはおかゆで（うんうん）、飯になって、またおかしもんで、またおかゆに戻って、また飯になって（うん）、ほいで#####、ほいで、ご飯美味しくて、始めの##は、胃痛と（うん）、吐き気がしてたっけだよ。」（括弧内は、聞き手の相槌。#は、聞き取り不可）

女性のケアマネのX氏は、A氏にリハビリをしてもらいたいと思っており、それを介護保険の制度的な条件と理念にそってA氏を説得しようとしている。一方、A氏は、自分が今の体の状態に至った過程を食べ物のエピソードを基に語っている。はっきりと口にはしないものの要するに自分はリハビリができない身であり、それは仕方がないことである、と伝えようとしている。このずれは、この後も30分ほど続いていき、平行線のまま終わる。Xケアマネは、リハビリをさせようとA氏を理屈で追いこむように話しかけていき、それに対しA氏は自分が不調に至る体験談や不調であることの仕方無さを医師に認めてもらった時の体験談を語ることで応じている。応じているというよりも、応じないために様々な体験談を語っている。

このずれ方は、概念的にはJ.S. ブルーナー（1998）の理論を応用して、Xケアマネによる論理－科学的な表現様式と、A氏による物語的な表現様式との対立として理解することができる。先にあげた例で言うと、私が、パーキンソン病の女性に服薬管理の重要性を説得しようとし、それに対して女性が次々と話題を変えていく関係に似ている。また死にたいと言う女性を死なないように説得し、その女性がやはり次々と話題を変えていく関係とも似ている。ブルーナーは、論理－科学的な思考様式と物語的な思考様式という概念を使っていて、思考様式の違いが、表現様式の違い、ここでは論理的に理解し理解させようとするXケアマネの言葉と、体験的な物語をもって伝えようとするA氏の言葉との違いとなって現れてくると考えられる。

なぜ、A氏は、物語的な表現様式によって伝えようとするのだろうか。論理－科学的な表現とまでは言わなくとも、論理－科学的な表現を志向した表現様式を採用してくれれば、もっとことはスムーズに進むように思える。それは、パーキンソン病の女性にしても、死にたいと言う女性にしても、そうである。実際に私が、物語的な表現様式で伝えようとしている人達を前にしている時は、私の話の進め方、つまり論理－科学的な表現様式が否定されているような印象を受ける。そして自分が否定されているように感じる。そして私はさらに相手を論理的に詰めていこうとむきになってしまう。

しかし高齢者たちは、否定することによって、論理－科学的な表現様式には包摂できない何かを伝えようとしているようにも思える。XケアマネとA氏との関係で、A氏は、医師によって今の体調不良に御墨付き（？）を得ていること、そしてそこに至るまで食の摂取の仕方に生じた変化を語っている。そのことによって、今の自分がリハビリができるような状態にないこと、リハビリができないのは仕方がないことなのだ、と伝えようとしているように感じる。さらに言えば、だから私に無理を言わないでくれ、と言っているようにさえ聞こえてくる。後の談話内容をここには載せないが、文脈的に言って今の私の推論は間違いなく、Xケアマネもそう理解して、さらに理屈っぽくA氏にリハビリの必要性を説いていく。

では、A氏は、なぜ率直に言わないのだろう、「リハビリができるような体調ではないのだから、どうか私に無理を言わないで欲しい」と。おそらく、そう口にすれば、つまりXケアマネの論理—科学的な表現様式に対して、率直に答えたのでは、A氏は負けてしまう。XケアマネがA氏に提案しているリハビリは、それほどハードなものではなく、日々の生活の様子からも決して不可能ではない。健康を維持し、回復していくことを理想とした場合、リハビリをしたほうが良いことに異論はないはずである。にもかかわらず、A氏にはリハビリをしたくない理由があるのだ。それは実は、A氏自身にもよくわからないのかもしれない。「そう安易に努力しろなどと言ってくれるな、どれほど辛い思いをしながらこの状態を維持しているのか、おまえにわかってたまるか」という情緒的な、しかし実感としては否定しがたい反発心もあるようにも思える。それは、論理—科学的には表現しがたい。理詰めで考えていけば、やはりリハビリをしたほうがよいという結論に必ず至る。だから、論理—科学的な表現様式をA氏は採用できない。その時に誰もが従うべき普遍的な基準——できるだけ健康であれという理念に基づき万人に当てはまるように設計された医療・科学的な評価基準——に自分を位置づけるように表現するのではなく、つまり論理—科学的に自分を表現するのではなく、他の人に譲ることのできない自分自身の体験や感覚の確かさ——これは誰にも否定できない——を頼りに表現することを志向したように思える。そこで無意識のうちに採用されるのが、物語的な表現様式だと言える。彼の信じる医師が「リハビリをしなくていいよ」と言ってくれたのである、そして彼の信じる医師にそう言わせるほど——食を通して——辛い思いをしてきたのである。

誰にぶつけていいのかわからない精神的な負荷を、即座に無かったことにして、では健康に向かって努力しましょう、などと言ってもらっては困るのであろう。先ほどのパーキンソン病の女性に関して言えば、なぜ自分ばかりと悔しい思いをしながらパーキンソン病と向き合ってきた過去とそのために積み積もった恨みを抱える現在を知りもしないくせに、もっとしっかりと服薬管理をしましょうなどと説教しないでほしいのだろう。やはり死にたいと電話してくる女性に関しても、死にたくなるほどの寂しさや辛さに対して、手短なサービスで解決を試みようとする態度に納得がいかないのだろう。まっすぐに健康な身体と安全な生活を目指す論理にそえば、リハビリをすべきであるし、正しく服薬管理すべきであるし、デイサービスを使ったほうがよい。そうした論理からはみ出していく思いや抵抗したくなる思いが、お年寄りたちの言葉を物語的な表現様式に傾けていく。

論理—科学的な表現様式にいわば対抗するようにして誘発される物語的な表現様式を見てきた。それを、今の私は、対立的な関係における感情的な反発力によって高められた自己表出によると理解している。「介護予防を勧めるケアマネ」対「それを拒否する要支援高齢者」という組み合わせは、論理—科学的な表現様式との対比で、ある意味劇的なかたちで——業務遂行を減速させたり挫折させたりするように——物語的な表現様式を出現させる。が、特に対立的な関係でない時にも、高齢者の物語的な表現を確認することはできる。

Mさんの談話資料

——詩の表現様式——

問いに対する答えが、端的に表現して収まりのつくようなものではない時、同じことだが答えがそのままイメージを表出させたり意味の含みを膨張させるようなきっかけとなるとき、やはり物語的な表現様式へと移行していく。

本論末に載せた談話資料は、私が、ある女性の高齢者にインタビューした時のものである。彼女は、86歳で要介護1。最初に、私が高齢者の言葉の研究をしていて、普段誰とどのような話をしているのか、調査していると告げてから、具体的な質問をしている。全体としては1時間ほどであるが、談話資料に載せたのは、話しはじめてから25分ほど経ってからの発話内容である。

調査者とあるのが私であるが、最初に「例えばMさん、今ね、何か楽しみにしていることってある？」と質問してから、約10分後まで質問らしい質問はしていない。理解できないところで情報を補うようお願いしたり、共感できる場所ではそう表現しているだけである。

談話資料の右端に、前後の発話内容の意味的なまとまりが作る話題を記し、それらの連続性や切り替わりがわかるようにした。調査者としての私が「何か楽しみにしていることってある？」と問いを発した後、Mさんは、次のように話題を展開させていく。記号Tは、話題を表す。

- T 1 〈甥や姪に会うことについて〉 姪や甥に会いたい
- T 2 〈姪の美容院について〉 姪は美容院を経営している
- T 3 〈姪の二男の結婚について〉 姪の二男が結婚を予定
- T 4 〈姪の長男の子どもについて〉 姪の長男の子どもに会うのは楽しい
- T 5 〈姪とおおづかいをめぐるやりとりについて〉 甘える姪が可愛い
- T 6 〈姪の美容院について〉 姪の美容院は無料で利用している
- T 7 〈姉の介護の状況について〉 姉は要介護5だが、自宅で介護している
- T 8 〈介護者の状況について〉 主たる介護者は子どもが小さいので制限される
- T 9 〈土曜日に来る医師について〉 シゲマツ先生が土曜日に往診する
- T 10 〈介護に携わる人達について〉 誰が介護するのか
- T 11 〈施設への入所について〉 施設入所のための経済的な余裕がない
- T 12 〈誰かについて〉 入所について経済的な負担を感じたのは誰か
- T 13 〈自分が入るお墓について〉 姪たちのお墓に自分は入る
- T 14 〈お金持ちの姪たちについて〉 姪たちは、恵まれた環境にある。
- T 15 〈姪の孫たちについて〉 姪の孫たちはMさんを気にかけている
- T 16 〈幸せだと思うことについて〉

実際には話しているのだから、書き言葉のように細かく意味を追ったり、前に戻って確認したりすることはできない。たとえ文字にした状態であっても、一読しただけでは、最初の問い「楽しみにしていることは？」に対して答えているのは、最初の話題くらいまでで、その後はずっと思いつきだけを話しているような印象を受ける。文字にしたものを、20名ほどの学生たちに見せて感想を書いてももらったが、そこでも、Mさんが一方的に話し質問に答えていない、というものが多かった。

実際にはどうなのだろう。文脈的にそれほど無理のない範囲で意味を推論させていくと、

最初の問い「楽しみにしていることは？」に対して、近づいたり遠のいたりしながら、それでもたしかに答えになっていることが確認できる。そもそも冗長的でまわりくどいために、解説そのものもくどくなってしまうのだが、順に追っていく。

話題の流れだけを見ると、最初の話題 T1 では、問いへの直接的な答えとなっている。が、その直後の話題は、前の発話内容の中から恣意的に選ばれた部分の連想によっているだけで、最初の問いから外れていくように感じる。「姪や甥に会いたい」(T1) と口にしたので、その姪の連想で、「姪の商売」(T2) について話題にして、続いて「姪の子どもたち」(T3) に移る。

ここまでで、いったん最初の問いから外れたように感じるが、その後、「姪の子どもの子ども」(T4) について話題にして、姪の長男の子どもに会うのは楽しいと言って、そこから「姪とのおこづかいをめぐるやりとり」(T5) に移って、おこづかいをねだって甘えてくる姪が可愛いと言う。調査者の最初の問い（「楽しみは？」）との問いに対して、いったん外れたように見えながら、ここにきて、最初の問いの答えになっている。再び最初の問いからずれていく部分に移るが、おこづかいを姪にあげることを話題にしたので、実はあげるだけではなくて、自分ももらっているという意味を込めて、姪の美容院を自分は無料で利用している (T6) と話を繋げる。そして、そこからその姪の自宅で介護している義理の姉（姪の母親）に話題 (T7) が換わる。この姉に対する介護者や介護の状況に話題が移って (T8-T10)、かなり介護で苦勞しているから施設へ入所させたい、という連想から、しかし費用がかかるので難しいと話題が移っていく (T11-T12)。このあたりでは、最初の問い（「楽しみは？」）からかなり話題が離れた印象を受ける。さらに、Mさんが、正確には自分ではない姪の息子を「息子」と呼んでいることが調査者の質問からわかる。そこから息子と呼びたくなるほど家族的な繋がりがあることを強調するためか、または義理の姉の介護に多くの家族が関わっていることと対照的にMさんが現在一人でいることが意識されたのか、Mさんは、自分が姪たち（甥、その母親である義理の姉）と同じお墓に入ることになっているから安心だと (T13) 話す。さらにまたそのお墓を共にする（はずの）姪たちが経済的に豊かな環境にあること (T14) を話すので、ここまでは、最初の問い（「楽しみは？」）から、外れたままのようにみえる。義理の姉の介護、自分のお墓、姪たちの経済的な豊かさ、と脈絡もつかみづらい。

しかし、その姪の孫たちが、Mさんと会いたいと言って気にかけてくれていることを話題 (T15) にすることで、そのことが、自分の楽しみであるかのように間接的に答えた後に、「わたし自分で幸せだと思っています」と口にする (T16)。最初の問い「楽しみにしていることは？」から、約5分経過して、今見たように非常にうねるような話題展開をしているが、ここにきてやはり会うことを楽しみにしている姪たち（姪の孫）の話題に戻って、彼女たちが自分を気遣ってくれていることに喜びを感じているようなことを口にした後に、「わたし自分で幸せだと思っています」と言っている。

繰り返しになるが、たしかに冗長的で、親族関係も正確な説明なしに語られており、推論によって補う負担も大きい（要するにわかりづらい）のだが、しかし問いへの答えにはなっているのである。

語られた順番を入れ替えながら、内容だけを整理すると、次のようになる。

「姪たちと会うのが楽しみである。姪たちは、とてもお金があって幸せそうにしている、みんな協力して義理の姉を自宅で介護するような家族の繋がりをもっている。そうした姪

たちと私は普段から親しく付き合っていて、私を心配してくれるし、一緒のお墓に入れてもらうことになっている仲である。そうした姪たちと会うのが楽しみであり、私は幸せである。」

Mさんは、なぜ、率直にこう言わないのだろうか。もちろん他の解釈もなりたつだろう。姉は介護を必要としているが、自分は一人暮らしができるほどには元気である、と言いたいのかもしれない。また姪たちを理想化しているのは、そうした理想的な人達と自分が結びつきをもっていることで間接的に自分を理想化しているとも言える。文脈的に想定できる範囲でもまだ解釈の可能性は残っているが、本筋は上に整理した内容でよいと思う。そして、また同時にそうは言っていないのである。なぜ、そう言わないのか。整理されずに表現されているものとは何か。先に記したケアマネに抵抗する高齢者と同じように、Mさんも、率直に言っただけでは伝わらないイメージが意識のなかに滞留していて、それが物語的な表現へと言葉を押し出している。

カムチャッカの若者が
きりんの夢を見ているとき
メキシコの娘は
朝もやの中でバスを待っている
ニューヨークの少女が
ほほえみながら寝がえりをうつとき
ローマの少年は
柱頭を染める朝陽にウインクする
この地球では
いつもどこかで朝がはじまっている

ぼくらは朝をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていわば交替で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚時計のベルが鳴ってる
それはあなたの送った朝を
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

(朝のリレー 谷川俊太郎)

文章の最初にある傍線を引いた箇所は、出来事を語っている。分解して文として切り出すと二つの文からなる。「カムチャッカの若者が きりんの夢を見ているとき メキシコの娘は 朝もやの中でバスを待っている」「ニューヨークの少女が ほほえみながら寝がえりをうつとき ローマの少年は 柱頭を染める朝陽にウインクする」文字通り読めば、ただそれだけのことである。内容としては、ニューヨークに住んでいる女の子が、ベッドのなかで寝返りをした時に、ローマに住んでいる男の子は遺跡の柱が見えるようなところにおいて、朝日に向かってウインクした、というだけである。それが詩として読んだ時（文学として、またはイメージを増幅させるために標準的な言葉の組み合わせに対して差異化が施された表現

として見た時)、一方で言葉が持つ韻律的な流れや映像的な確かさをもって感じ取られ、もう一方で出来事の具体性が抽象化されて何かの喩えとして読みとられる。ここで言う韻律的な流れとは、音の響きとテンポが優先され、意味としての無駄な説明が省かれかつ改行を次々と差し込むことで、言葉の繋がりが積極的に前進していくように配置された表現の効果のことであり、映像的な確かさとは、印象的な場面が写真で切り取ったように、またはショートムービーのように言葉で描出されていることを指している。そして、これらの表現が意識に残す反響の強さによって、ある特定の場面を描写しているはずの言葉は抽象化されて、ここでは、地球に次々と訪れる朝に合わせて、子どもたちが順番に起きていくこと、そこからさらに大人たちや国家の都合を超えた象徴としての子どもたちが、朝日に象徴される希望を絶えず順番に引き継いで、平和や幸せの可能性で地球を覆っていること等々の喩えとなっている。このことは、傍線部より後の部分で、やはり映像的ではあるが、ある特定の出来事を超えた抽象性の高い表現によって明かされる。傍線のない後半部分もさらに何かの喩えになっているが、相対的に言えば、前半の喩えの説明の部分になっている。物語的という言葉がジャンルとしての物語を連想させるので、使いづらいのだが、ブルーナーが言う文字通り物語的な思考様式 (narrative mode of thought) にそった表現である。

ここでも先のMさんの時と同じ疑問が生じる。そんな回りくどい言い方をしなくても、率直にたとえば「大人や国家の利害を超えて、平和に暮らすべきで、その可能性を子どもの視点から探ることができるはずだ」と言えればいいではないか、と。論理的な思考力や表現力が構成されていないような人類史の段階ではないのだから、なぜ神話や説話のように比喩的に（さらに寓意的に）解釈されるのを待っているのだろうか。本質的に詩とは何か、文学とは何か、という問いと同じになってしまうが、ひとつだけ言えることは、たとえ読み手に解釈の負担をかけても、書き手にとっては、そう言うこと以外に気持ちが納得しなかった、ということである。「朝のリレー」を例にとると、抽象的に「大人や国家の利害を超えて……」と言う事自体が目的ではなく、「カムチャッカの若者が／きりんの夢を見ているとき……」というように、その言葉——音の響きや意味——の組み合わせで、その順番で、その改行の仕方、表現することでしか実現できないことが、まずは作者の意識のなかにあるということである。

Mさんの話に論点を戻すと、「楽しみにしていること」は、要するに「姪たちと会うこと」である。たとえば質問紙調査で「あなたが普段楽しみにしていることは何ですか。該当する番号にマルをつけてください」とあって、「1. テレビをみること 2. 読書をする事 3. 友達や友人と会うこと 4. 買い物をする事……」と選択肢があり、ただ3にマルをつけるだけである。それでは、Mさんは、自分の楽しみを本当には語ったことにならない。その姪たちが、「とてもお金があって幸せそうにしている、みんなで協力して義理の姉を自宅で介護するような家族の繋がりをもち、そうした姪たちと私は普段から親しく付き合っていて、私を心配してくれるし、一緒のお墓に入れてもらうことになっているような仲である」という情報が付加されることが大事なのだろう。しかし、おそらくまだそれでも楽しみを言いきったことにならない。そこで、上に書いたような抽象性を超えて、個々の具体的な場面が言葉にされる。姪は、ただお金持ちだというのではない。姪は美容院を経営していて、それは、〇〇町という街中であって、非常に高い費用がかかるはずのあの〇〇というビルの2階を借りきって経営するほどの立派な美容院なのである。また姪とは、おこづかいをあげ

たり、美容料を無料にしてもらうような親密な関係なのだが、やはりそれだけではない。(行番号 19-23)

姪が甘えて、「叔母ちゃんお金ちょうだい」って、「私がもらうほうじゃない。」「いいよ、私が欲しいんだよ」って。#### さんも（姪の夫の名前？）、働けないもんで、婿さんの悪口言ってる。それで1000円やったら、「おばさん、これ子どもじゃなか」と。5000円もらったら、「ありがとう。本当にいい？」なんて言って、「いいもなにもあんた、欲しいって言ったじゃん、さっき」って言ってね。

と事細かにおこづかいをめぐるやりとりを再現するが、その中で素直に欲しいものを口にしたたり、婿の悪口を言ったり、冗談を言ったりできるほど、心を許せる仲なのである。

「朝のリレー」でも、「カムチャッカの若者が／きりんの夢を見ているとき／メキシコの娘は／朝もやの中でバスを待っている」とあるように、実際にそこでその場面を思い描くことが表現の価値を構成している。ある地域の子供が寝ている時、それより数時間先行する地域の子供は、朝を迎えている（可能性がある）という一般的な事象に抽象化されるとしても、作者としては（つまり表現の価値としては）、いったんカムチャッカの若者がきりんの夢を見ているとき、国境を越えたメキシコの娘が、朝もやの中でバスを待っているイメージを作る必要があった。それ無しに「交替で地球を守る」ことの意味や具体性を、満たすことができないからである。

—物語の表現様式—

Mさんは、「わたし自分で幸せだと思ってます」と口にするので、姪たちとの関係についての話を終わりにして、大きく次の話題に転換させる。「わたし自分で幸せだと思ってます」と言った後に「下を見たら、きりが無いでしょ、上を見たらきりが無いでしょ。」と付け加えている。これは、姪たちとの関係を楽しみとすることで満足しなくてはいけない、と自分に言い聞かせているようであり、調査者である私にも、同意を求めている。姪たちと交流を持てる現在がどれほど幸せなことなのか説明するためにMさんは、この後自分の過去の苦労を話題にしていく。(行番号 80-94)

私の親が鉄道に勤めたんだけど、貨車から落ちて足を折っちゃった。

松葉杖ついてたでしょ、まあ働けなかったの。

おばあちゃんが静岡に##、気位が高いもんで、全然内職とかしないの。

口ばかりで、おじいさんをいじめてね、可哀想だった。

で、私達働いてやって、どのくらい困ったかわからない。

おじいさんに、むかし、焼芋ひとつ、買っても怒った。

「やることはない」って、「こんな働かないおやじさん持って苦労してるのに」って、私はそうは思わないけどね。

だから、おじいちゃん可哀想だなと思う。

最後に言ったのは、名古屋へ帰るって言ったら、うしろ見たら、####5円のお金くれたから、「まあいいよ、おじいちゃん」なんて言って。

が9円だったから、安かったよね。何十年か前だから。

でもね、おじいさん死ぬまで「トシコ、トシコ（Mさんの名前。本名はトシ）」って呼

んでたって言って、ウエノ（仮名）の叔母ちゃんが、おじいさん可哀想だったよって、もう声も出ないのに「トシコ、トシコ」って知らぬ間に呼んでたって。
家の主人は、死んだら行けばいいって言ったの。
行くなって、死んだら電報でやっと帰って来た。
そういうところで苦勞してるから、今、幸せだと思ってる。
日当たりはいいし、静かだし。

この部分は、約1分30秒くらいであるが、このおじいさん——父親のことらしいが、姪の位置からなのか、おじいさんと呼ばれている——の話題に移ったところで、最初の問い（「楽しみは？」）は、どの程度意識されているかわからない。姪たちの関係については、現在積極的に楽しみに思える話題であり、それが幸せであると言ってる。この「幸せだと思ってます」を口にしたところで、現在の幸せが主たる問いに移っている。そこで、現在と相対的に過去がどれほどひどかったか、その「苦勞」を語ることに話題を移した。それがこの部分の話である。先の姪たちとの関係については、次々と様々な話題を取り上げながら、その意味を満たしていくような語りであったが、この過去の苦勞の部分は、父との出来事を一つの構成をもったストーリーのように語っている。別の言い方をすると、「姪たちとの関係について」が、時間的な前後関係は問わずに印象的なエピソードをパッチワークのように継ぎ接ぎしていく話であったのに対して、「おじいさん（父）について」は、時間的な経緯にそったストーリーとして構成されている。ストーリーの構成の基本は、最初に主人公に課題が与えられて、それに応じる出来事が時間的に展開していくことにある。昔話や説話では、出来事の展開と、それが寓意を持つことに重点があるだろうし、現代的なストーリーでは、主人公による出来事の捉え方——意識や心の向け方——に重点がおかれている。「おじいさん（父）について」では、おじいさんが主人公である次元では、骨折して足が不自由になることが課題であり、さらにそれを見ているMさんが主人公である次元では、——この話では、Mさんが真の主人公であるが——そうしたおじいさん（父）の家庭に育ったことが課題である。おじいさんの生涯と、おじいさんが亡くなるまでのMさんの生涯とが、重ねられるように語られていて、苦勞が二重写しにイメージを作っている。おじいさんは、骨折して働けなくなり、妻（おばあさん）から苛められ、Mさんが実家から嫁ぎ先に戻る時にわずかばかりのお金を渡し——Mさんが大事な存在であったというだけでなく、自由にできるお金をろくにももらっていなかったことを暗に語っている——、亡くなる時には——周囲に大事にされなかったのか、妻や側にいる人の名前ではなく——、遠く離れたMさんの名前を呼びながら、亡くなっていった。Mさんは、実家を離れるまで、おじいさんの苦勞を見てきたし、心のなかではかばってきたが、一方で働けないおじいさんのために自分も働く苦勞をしてきた。また実家を離れてからも夫に自由を奪われて辛い生活を送ってきて、おじいさんの最期に立ち会うことが許されなかった。そうした辛い過去をもちながらも、今は良いところで暮らすことができ幸せで、糖尿病を患っている以外に不足はないと言っている。その後から、また別の話題に移っていくので、先の「姪たちとの関係について」の部分と同じで、「幸せだと思ってる」が一つの大きな話題の終結部で使われている。

ここでも先ほどと同じように、この苦勞話を抽象化して整理してみる。「父（おじいさん）が働けなかったために、子供のころから働き苦勞してきた。その父も働けないことを母から

責められ、大事されてこなかった。私は、そうした父を可哀そうだと思ってきたし、父も私を大事に思ってくれた。実家を離れてから私も夫で苦勞したので、父の最期に立ち会うことはできなかった。」内容だけを取り出せば、こうなるだろう。しかし、もちろんこのようには語っていない。談話記録にあるように、特定の場面——焼き芋を父にあげようとして母に怒られた場面、静岡を去る時に父がわずかなお金をくれた場面、父が亡くなる時にMさんの名前を呼び続けた場面——を、その動きのままに細かく語ることによって、ストーリーの各パートとなり、またそれが時間的な流れにそって配置されてストーリーを構成している。その間、わずか1分30秒ほどであるが、Mさんの父親の生涯や、Mさんの子供期とその後の苦勞を辿ってきたような印象を残す。それは、一つには、やはり「朝のリレー」と同じように具体的な出来事の描写によるもので、それにより聞き手が語り手の視点を追体験するからにはほかならない。つまり聞き手は、語り手と同じ視点に、半ば強制的に立たされて、その場面に一緒に立ち会うことになる。さらに、もう一つ、「おじいさん(父)について」の話で大事なことは、ストーリーの構成をもっていて、最初に設定された課題(おじいさんの骨折)が、欠如感や緊張感を作りだし、それがどのように解決されていくのか、またはさらなる課題を生んでいくのか、次への展開を強力に引きつける効果を持つ。聞き手は、欠如感や緊張感をセットされてしまい、その後の展開に期待せざるを得ない境遇におかれる。そのため、途中で話の腰を折るわけにもいかず、仮に冗長的で面倒だと感じて、その課題の結末まで、付き合わされ、聞かされてしまうのである。

おわりに

Mさんの話に物語的な表現様式の特徴を確認してきた。相談員、ケアマネージャ、または研究者のように、情報を論理—科学的にまとめあげることが職業的に必要とされる立場から高齢者に向かう時に、率直に質問に答えてもらえずに、話が冗長的に感じられ、話の要点がわからなくなることがある。それを物語的な表現様式という観点から、話の意味や価値を確認してきた。相談員の時には、繰り返し繰り返し話を聞かなかである種の勘に頼りながら理解していたものを、現在は文字化することによってより鮮明に確認することができる。現場にはその時間がないが、物語的な表現様式のポイントをあらかじめ理解しておくことが、聞くべき話のポイントに集中して耳を傾け、受け止めていくための手助けになるように思う。

最後に確認しておくこと、にもかかわらず、やはりMさんの話は、決して文学作品にはなっていない。論文のような表現様式ではなく、文学的な表現様式の基本的な要素にそってはいるが、決して作品にはなっていない。なぜ、文学になっていないのか。このことを論じることは、文学とは何か、という問いと、ここで対象としてきた要領を得ない話——少なくとも最初は——が、そう感じられる理由とを同時に説明できるような視点が必要となるのだろう。また別の機会に論じてみたい。

参考文献

- 吉本隆明(1990)『定本 言語にとって美とはなにか I・II』,角川書店.
- 小野田貴夫(1997)言説の様態,大阪府立大学人間文化科学研究集録.
- 小野田貴夫(2005)言語表現の様態と関係性,常葉学園短期大学紀要 36号.
- 小野田貴夫(2006)単位と文学性—『心象スケッチ 春と修羅』の序について—,常葉国文 29号.

小野田貴夫(2006)高齢者の語り＝話の特徴を理解するために,常葉学園短期大学紀要 37号.

小野田貴夫(2007)子どもの認識様式と児童文学―宮澤賢治『いてふの実』を資料として―,
常葉国文 30号.

J.S. ブルーナー J.S.(1998)『可能世界の心理』,みすず書房.

話 録 資 料	時間	発話者	発話内容	注 # 聞き取れない箇所。行数の分、#をつける。	
1	0:24:25	調査者	(インタビュー開始から24分25秒後経過)例えばMさん、今ね、何か楽しんでいることってある		
2	M	M	まあねえ、姪、甥に会いたいわね、はつきり言って。		T1「甥、姪の子に会うことについて」
3	M	M	そうか、そうか。		
4	M	M	姪はピョウインだから。		
5	M	M	病院ってどういうこと？		
6	M	M	美容院。		
7	M	M	美容院で働いている、ほう。		
8	M	M	かけてるから、三月(さんつき)、四月(よつき)に一連ずつ行ってます。		T2「姪の美容院について」
9	M	M	〇〇(地名)で、△△(町)のバス停の前。		
10	M	M	なんだっけな、□□(ピルの名前)って、ピルの2階、全部借りて、二、三十年やってますね。		
11	M	M	長いですね、へー。		
12	M	M	も、生まれた子ども(姪の息子)がこの秋に嫁さんもうだよ、三十でしょ。		
13	M	M	その姉ちゃん(姪の長男の妻)も、五年遅かったけど、赤ちゃん生まれて、その子たちも男に行くの。		T3「姪の二男(弟)の結婚について」
14	M	M	三回男に行った、〇〇(地名)にいるけどな。		
15	M	M	けっこう、喜ぶはね。		
16	M	M	そういうの楽しみですよな		
17	M	M	楽しみますよ、甘えるしね子どもは。		
18	M	M	####姪が甘えて、「叔母ちゃんお爺ちゃんお爺ちゃんどうだいって、「私がもううぼうじゃやない。」「いいよ、私が欲しいんだよ。」って。		
19	M	M	####さんも(姪の夫の前で)、働かないもんで、嫁さんの悪口言ってる。		
20	M	M	それで1000円やったら、「おばさん、これ子どもじやなかかど。		
21	M	M	5000円もたらら、「ありかどう。本当にいい？」なんて言って、「いいもなにもあんた、欲しいって言ったじゃん、さっき」って言ってね。		T4「姪の長男(弟)の子どもについて」
22	M	M	まあ、かえって、甘えられれば可愛い。		
23	M	M	まあ、かえって、甘えられれば可愛い。		
24	M	M	美容院は、ただだから。		
25	M	M	ああ、そうですね。		
26	M	M	だからね、##、##、###おこずかい？くれても惜しくないしね、美容院もね、お母さんが見てくれてるから。		T5「おこずかいをめぐる姪とのやりとりについて」
27	0:26:09	M	姉さん(兄)の妻？X666級専らですって。		T6「姪の美容院について」
28	M	M	5級ってどういう意味ですか。		
29	M	M	介護。		
30	M	M	要介護5？		
31	M	M	要介護、だけどこのあいだ見に行ってきたけどね、これって思うくらい。		T7「姉(兄)の妻)の介護の状況について」
32	M	M	元氣なこと？		
33	M	M	トイレに行けない、行きましたよ、つかまって。		
34	M	M	オムツもね、支給されるとか、「おばさん、良かつたら持ってきたよ」、「いらなよ」って。		
35	M	M	どららにいらっしやるのですか、住んでいる場所は、老人ホーム？		
36	M	M	入れないの。		
37	0:26:40	M	お家に居る、ああ、お家に居るんですか		
38	M	M	それで、その子の孫(姪の長男の妻)がね、取ったの、資格を。		T8「介護者の状況について」
39	M	M	ヘルパー		
40	M	M	赤ちゃん(が)、去年、生まれた子(姪の長男の妻)でしょ。		
41	M	M	小さいの連れて出れないでしょう。		
42	M	M	その子(を)ね、今日、居るでしょ。		
43	M	M	火曜日(から)木曜(金曜)までいるのだから、そういうふう(に)決めてもらってお戻(か)ら行って、それから土曜(日)には、先生(が)往診(し)してくれるんでして。		T9「一週間の介護のスケジュールについて」
44	M	M	それでね、肝臓が悪いもんで、透析(し)られて、注射(打)られて、その先生(が)、シゲマツ(仮名)先生(が)女(の)先生(だ)。		
45	M	M	ああ、聞いたことがある。		
46	M	M	女医(先生)ね、〇〇(病院)の先生、あの方(が)来てく(ざ)って、		
47	M	M	それで、####その時(は)〇〇(地名)の二番(目)の婦(科)が来るんだわね、娘(の)子(だ)。		
48	M	M	姉(さん)は、あれ、お嬢(さん)でしょ、あれ、####薬剤師(だ)でしょ、顔(が)いいもんでね、####相当(動)いてくれたの。		T10「介護に携わる人達について」
49	M	M	それ(だ)もんで良かったんだ。		
50	M	M	それで、そのつ(ら)に、ヨシエ(仮名)は、土曜(日)に先生(が)来てくれて、やって下さ(っ)って、ミチヨ(仮名)が来て、日曜(日)は息子(が)いるからね。		
51	M	M	だから月曜(日)はお姉(ちゃん)が、美容院(が)休(み)だから、火曜(日)から、土曜(日)まで、子ども(も)か孫(が)来るわけ、孫(が)####連れて、全部、家族(で)見てるわけ。		T11「施設への入所について」
52	M	M	よそへ入れよ(う)と思(っ)たらね、30万(か)かるんでして。		
53	M	M	一月(ひど)つき？		
54	M	M	全部、多いでしょ。		

映画的

映画的

行番号	時間	発話者	発話内容	注 # 聞き取れない箇所。句読点の分、#をつける。	補注
55		M	それなら、うちの息子ね、お寮、給料を全部はたいも、やつたら、ほく、食べて行けないよ。って言うわけ。		T12「誰かについて」
56		M	Mさんの息子さん？		
57		M	いや、うちの兄の息子。		
58		M	ああ、そういうことね。		
59	0:28:28	M	あたし、そのうちへと、死んでも、名前が変わっているけど、おつすさん(お坊さん)が、うちの甥と同級生だね。		T13「自分が入るお寮について」
60		M	それも、おつすさんでしょ、「お宅から出た娘さんね、もうあれ##戸籍が一緒ならね、いいですよ」って言ってくれたの。		
61		M	「おはさん、おじいさん(父)とご入んなって言ってくれたの。		
62		M	私は実家に戻ります。		
63		M	だから安心し(す?)ましたね、何から何まで。		
64		M	そこと#####でしょ。		
65		M	ええ、ええ。		
66	0:28:59	M	いい、いい甥、強も恵まれた。		
67		M	姪もい所へ嫁に行ったもんて、2番目の子も特に、金持ちにお嫁に行ったから、いまは息子が大学1年生だけど、来年はドイツへ留学するんですよ。		T14「お金持ちの嫁たちについて」
68		M	それだけのお金があるんで、いい所にお嫁に行った。		
69		M	ねえ、だから幸せですよ。		
70		M	で、わたし(ん)、「もつダシちゃん(仮名)に会えなくならね、連れて来てよ」って言ったから、今度連れて来るかもわからない。		T15「姪の嫁たちについて」
71		M	まあこの間付近じゃ(この間=最近/付近=最近)、連れてきたけどね。		
72		M	敬孝の日。		
73		M	「おはちゃん、死んじゃったらね、もうあんた、帰るうちね、おはさん、ないんだから、そしたら、タダシも連れて来るよ」って言ったけど。		
74		M	たもんで、「マサヨちゃん(仮名)と、お姉ちゃんどね、マサちゃんに会いたい」って言ったよ、「マサヨも連れてくるよ」って言ったけどね。		
75		M	「おはさん、80に昇えないうよ」って、お世話にも言ってくれるけどね。		
76	0:29:56	M	わたし自分で幸せだと思ってます。		
77		M	下を見たら、きりが無いでしょ、上を見たらきりが無いでしょ。		T16「幸せだと思っていることについて」
78		M	まあ、そういうことはありますよな。		
79		M	自分も苦労したからな。		
80	0:30:07	M	私の親が鉄道に勤めたんだけど、背車から落ちて足を折っちゃった。		
81		M	私業杖ついでたでしょ、まあ働けなかつたの。⇒(誰かが)		
82		M	おはあちゃんが静岡に##、気位が高いもんで、全然内職とかしないの。		
83		M	口ばかりで、おじいさんをいじめてね、可哀想だった。⇒(誰か)		
84		M	で、私達働いてやって、どのくらい困ったかわからない。		
85		M	おじいさんに、むかし、嫌味ひとつ、置つても怒った。		
86		M	「やることはない」って、「こんな働かないおやさん持って苦労してるの」に、		
87		M	私はそうは思わないうけどね。		
88		M	だから、おじいちゃん可哀想だと思つた。		
89		M	最後に言ったのは、名古屋へ帰るって言ったから、うしろ戻たら、##5田のお金くれたから、「まあいいよ、おじいちゃん」なんて言って。		
90		M	#####が9田だったから、安かつたよね。何十年か前だから、		
91		M	でもね、おじいさん死ぬまで「トシコ、トシコMさんの名前。本名はJ)」って呼んでたって言って、ウエ/(仮名)の叔母ちゃんが、おじいさん可哀想だったよって、もう声も出ないのに「トシコ、トシコ」って知らぬ間に呼んでた。		
92		M	家の主人は、死んだら遺族でやつと帰つて来た。		
93		M	それいって苦労してるから、今、幸せだと思ってる。		
94	0:31:26	M	日当たりはいいし、静かだし。		
95		M	うん。		
96		M	何かある時は、街へ出たら、ただ、食べられないだけ困る、糖尿あるからね。		
97		M	Mさん、葉巻んで。		
98		M	だからね、私はね、自分、何の不足もない。		
99		M	うん、そうですか。		
100		M	ここで一生で、最後は県立病院だもん。		
101		M	ええ。		
102		M	最後、実家へ入る。(沈黙(葉の飲む)) 5秒/		
103		M	お寺のおつすさんが、うちの主人の墓前で、ここで暮らしてると、すぐ言うの。		
104	0:32:09	M	ただ、主人の甥がね、「そんなこと言わないほうがいい」って言うの、「おはさん、人に言われぬ苦労してきたんだから。」		
105		M	もうほんとに、鉄の##のように重い回したもんね、叩き殺すって。		
106		M			T20「往職による失への言及について」

行番号	時間	発話者	発話内容	注 # 聞き取れない箇所。行数の分、#をつける。	トピック
107		調査者	それ誰が?		T22.「夫の酒乱について」
108		M	酒乱、酒乱。		
109		調査者	誰が。		
110		M	うちの主人が。		
111		M	ああ、そうですね。		
112		M	朝から1升酒飲んで。		
113		M	だからね。知ってる方はね。主人が騒ぐと私、家を出て行った。		
114		M	「Mさん、病院運ぶだよ、って言って。」		
115		M	もう死んだだけだね。		
116		M	家の母が、兄が、一言良かったねって言ってくれた。		T23.「夫の死について」
117		M	人が聞いたら怒るけどね。		
118		M	兄には、そう言うって。		
119		M	何度が帰りたいって、何度か、言ったからね、結納は倍返ししろって。		
120		M	兄さんは3倍でも4倍でも返すって、そう言うってね、何度もダメだったの。		T24.「夫と別れることについて」
121		M	兄さんは承知して、帰れないと思ってたの。		
122		M	今ならいいけどね、時代が時代だから。		
123		M	母は近所の手前、帰って来るなって。		
124		M	兄嫁は困るって言うの。		
125		M	結局辛抱しちゃって、三十年ね。		
126		M	(韓国へ?)帰ってきたのが、五十五で帰って来たでしょ。		
127		M	(夫の死後?)3年働いて、ずっと病氣してるから。		T25.「夫の死後について」
128		M	良く知ってるのは兄だけ、たっだ1人の兄だけ、八十で亡くなったけど。		
129		M	だから(兄が亡くなったから?)ここ(現在のケアハウス)へと入る気になったの。		T26.「事情を知っている兄について」
130		M	私、慮まれてると思ってる。		
131	0:33:45	M	死んだけど、主人の恩給残しててくれたから、恩給でね、返ってきたよ。		T27.「恩給について」
132		M	それで、小遣い、わたしは、あの、いい社長さんでね、仕事くれる人が、内緒で、信託銀行ってあったでしょ、あれ貯めてくれた。		
133		M	一降九割付いもんね。		T28.「夫の死後の生活費について」
134		調査者	ああそうですね。		
135		M	あつたんですよ。		
136		M	それで、それが、小遣いになったわけわけね。		
137		M	それで、お医者さま行ってるの。		T29.「通院について」
138		M	だから、私の、###のオタさんでね、お医者さんけど(?)、		
139		M	足向けや悪いなって思ってたわけ、あれはね。		
140		M	どうしてるかなあと思う。		
141		M	会いたいなあと思うわね。		
142		M	奥さん、旦那さんがかかって、関わってくれてね、仕事だと上手に作っておいてくれたの、お金のあれを。		
143		M	で銀行、で信託銀行をしようめいして、主人死んだ、片付いてから持ってきてくれた。		
144		M	兄がびくびくしてたもんね。		
145		M	それで、一生のために買ったって。		
146		M	うちが削れちゃったのね。		
147		M	大家さんか出て行く所がないから、お部屋の社長さんが来て、建ててくれたんだわ。		
148		M	まずトタン板剥れて、トタン板こすして、うちを起してね、屋根壊れちゃったの。		
149		M	それを起してくれて、それで雪がないから、近所の他の衆が、むしろを敷いて買って。		
150		M	だんだん、から、す、こつちの、うちのなかの竹をやって、壁塗って、		
151		M	それで、お金になりやあ売るっ、言うわけね。		
152		M	Mさんには売らないって言うっの、飲んでるから。		
153		M	で、私に売って言う。		
154		M	社長さんが、あの当時国王だか出してきて、何万田だか出してきて、それで買ってぼつぼつ仕事をしながら返したのね。		
155		M	それがちよと主人が亡くなる2、3月まえに前に終わったの。		
156		M	主人が死んでから持ってきてくれた、現金で。		
157		M	家の兄がびくびくしてたもん、こんなにいい人はないって言って、		
158	0:35:44	M	おれを言ったけどね、助かった、だから助かったの。【録】		T30.「夫の死後の生活費について」 T31.「家の再建について」 T32.「返済について」 T33.「精立の返金と社長への感謝について」

嫉妬的

課題